

▶▶▶加藤 裕治

話題の書籍を読んでみて

年末年始、主要な航空会社の予約数は、コロナ前の九割程度にまで回復したという。一方、私は昨年と同様、自宅でテレビと読書。遅ればせながら、昨年の話題書を何冊か手に取った。

中でも「この部屋から東京タワーは永遠に見えない」（麻布競馬場著・集英社）と「世界は五反田から始まった」（星野博美著・ゲンロン）が印象に残った。双方とも多くの書評に取り上げられた話題の書籍だ。

前者は、ツイッター投稿をもとにした短編小説集だが、テーマは一貫している。人から見れば成功と思える高学歴な人々が、常に他者との比較の中でしか自分の位置を確認できない。そこに宿る彼らの焦燥や寂寞を、少々意地の悪い文体で描きだす。

背景には、ソーシャルメディアの存在がある。常にSNSに流れる他者の情報と自分を比較し、また自分自身も幸せな生活をSNS上で演じなければならぬ。昨年亡くなった社会学者の見田宗介が「まなざしの地獄」と論じた状況だ。さらに常時接続のネット社会は、以前なら気にも留めない日常のささいなふるまいも、他者と比較せずにはいられない。息苦しさは、ここに宿る。

一方、後者の星野博美の著作は、工場経営者であった祖父の遺したノートをもとに、祖父が生きていた時代を掘り起こそうとするファミリーヒストリーだ。日中戦争以降の東京に住む庶民が、どのような世間知を駆使しながら生活を営んでいたのか。描かれるのは、政治を中心とした大文字の歴史からは見えない、人々の生活史だ。

興味深い一説は人々が東京大空襲後、空襲の際は、消火より「逃げる」を選択したという指摘だ。「逃げる」を非国民と非難する他者からのまなざしに囚われては、生き残れないことがわかったのだ。最終的に重要なのは、状況を見極め、自身の判断で行動を選択する個の在り方なのである。

二〇二三年の年初、一見、全く内容の異なる二冊を手にとった。だが、この二冊が与えるメッセージは、先の見えない時代に対する共通した示唆を含んでいる。

（静岡文化芸術大教授）

2023年1月8日
中日新聞（朝刊）p.5